

特集にあたって

切れ目のない緩和ケアを提供できるよう、 在宅での症状緩和の質を問い直そう

企画・構成 茅根義和 ChinoneYoshikazu

(株式会社東芝 東芝病院緩和ケア科部長)

進行がん患者が在宅で療養すること、そして在宅でがん患者の緩和ケアを行うことが決して特別なことでなくなりつつある今、改めて在宅での症状緩和の質が問われている。患者が切れ目のない緩和ケアを受けられるには、在宅医の症状緩和に対する理解と実践可能な知識が不可欠である。

本特集では、在宅でのがん緩和ケアにおいて、もっとも頻繁に在宅医が直面するがん性疼痛をどうマネジメントするかについて取り上げる。

そこで、在宅医の明日からの診療に役立つ具体的なものを提示することを目標に、あえて基本的な部分をまとめて構成した。在宅でのがん性疼痛マネジメントの全体像をつかむ総論に続き、在宅でのがん性疼痛のアセスメント、非オピオイドとオピオイドの使い方、鎮痛補助薬の使い方、そして最後には内服が困難な患者へ在宅で鎮痛薬を投与する方法について述べている。これをきっかけに、読者の皆様においてはガイドラインや既存のマニュアルをひもといてさらに知識を深めてもらえることを願っている。